

退職教授 インタビュー



第 46 号

2016年 3月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/緑昭和堂



成人・老年看護学講座 教授・看護学科長

大田 明英先生

《ご略歴》

昭和51年 3月 鹿児島大学医学部医学科卒業
 // 年 6月 佐賀県立病院好生館 内科研修医
 昭和52年 4月 九州大学医学部 第一内科研修医
 昭和53年 4月 同上 研究生
 昭和54年 4月 佐賀医科大学医学部 内科学講座助手
 昭和59~61年 米国 Harbor
 -UCLA 医学センター Research Associate
 平成2年 6月 佐賀医科大学医学部 内科学講座講師
 平成7年 8月 同上 臨床看護学講座教授
 平成15年 佐賀大学医学部看護学科 成人・老年看護学講座教授
 平成20年 4月 佐賀大学附属病院 遺伝カウンセリング室 室長
 平成25年 4月 佐賀大学医学部看護学科長

《専門分野》

膠原病・リウマチ学 (臨床免疫学)、内科学、人類遺伝学

——最初に、先生が佐賀医大へ赴任された経緯を教えてください

小学校から高校までは、博多の中心部、櫛田神社のそばで過ごし、その後、鹿児島大学医学部に進学しました。昭和51年に卒業後、九大第一内科の医局に入ったものの、研修医としての初年度は佐賀に行きなさいと言われ、同年6月、佐賀県立病院(現・好生館)に研修医

として赴任しました。福岡で育ったにもかかわらず、佐賀市を訪れたのはこの時が生まれて初めてでした。翌52年4月には、再び九大に戻りました。さて、昭和53年に佐賀医大の1期生が入学しました。この時、内科は一つの講座でスタートし、後に佐賀医大の学長を務められた山口雅也先生が教授として就任されました。私が九大で2年目の

山口先生はすでに佐賀医大の教授になっておられました。その遺伝研究室の大ボスでもあり、研究室によく来られていました。研究室に入ってから1年近く経とうとしたある日(昭和53年の冬頃)の山口先生から「佐賀医大に来ないか」と言われました。当時の上司の言葉で、今の人々にはわからないと思いますが、全然重みが違うんですよ。もう絶対に逆らえませんでした。ええ、また佐賀なの!?と内心思いましたが、これは行くしかない!と腹をくくり、昭和54年から再び佐賀での生活が始まったのです。人生何があるか分からないものですね。医師になつて40年、米留学などを除き、少なくとも36年は佐賀に居ます。現在の教職員の中で佐賀医大の黎明期を知っているのは、もう私くらいじゃないですね。そういえば、病理の戸田教授や産婦人科の横山教授は第一期生で、病棟で実習していた学生時代の姿をおぼろげに覚えています(笑)。

——佐賀医大の開学当時、研究室や病棟での生活は?

赴任当時は病院もなく、基礎と臨床の研究棟が完成して1か月という状態でした。研究する設備もありませんでした。余談ですが、同じ高木先生のもとに第一外科から細胞培養を学びに来られていたのが現宮崎学長で、宮崎先生とはその当時、培養室内の隣のクリーンベンチでともに細胞培養をした研究仲間なんですね。

に往復しました。その当時はまだ高速道はなく、一般道を結構なハイスピードで走ってましたね。今となっては良い思い出です。

1年後、ようやく附属病院が完成し、各病棟に患者さんが入り始めました。当時の病棟は薄暗く、とても閑散としていました。一室だけ明かりが点いた病室に、一人だけポツンと患者さんがいるような感じでしたから、今では考えられませんね。

——大学でここが変わったと思われる点は?

医大周辺は全く変わりました。その頃は何も無かったんですよ。佐賀駅のホームに立つたら、遠く離れた平野の真ん中に「パツ」と赤レンガ色の医大が目立つんです。その頃に比べたらお店も増えました。ただ、それよりも学生の気質が変わりましたね(笑)。昔は上司に対して「ここ違うんだだけだなぁ」と思っただけで口には出さず、「そうですね」と相づちを打っていたのが、今は平気で「ここ違っていませんよ!」という感じですよ! (笑)。もちろん、はつきりと意見を言うのは良いことなのですが、昔は良きにつけ悪きにつけ上下関係がはっきりしていましたから、それが末端までサッと伝わっておとなしくなったものですよ。

——佐賀医大の時代は今より自由だったと聞きますが……

昔は留年制度がありませんでしたからね。1年生から6年生にそのまま

とも醜い様である。さて、ヤモリの失われた尻尾は再生するのだが、新しく生えてくる尻尾は短く、骨ではなく軟骨しか再生されない。不十分な尻尾だ。残念! ヤモリ。しかしこのヤモリ、壁や天井でさえも落ちることなく這いずり回れるという優れた能力を持ち合わせている。ヤモリの足裏には1mmあたり1千本以上の微細な毛が生えており、この毛と壁面との間に「Biber Waalstorce (フアン・デル・ワールス力)」。詳細については、地域医療科学教育研究センターの富永先生(富永先生)という物理的力が生じる。この力により、ヤモリは壁にへばりつくことができるのである。ある日本の企業はこの力に着目し、1cmあたり100億本の微細な毛を並べてヤモリのような接着力を産み出さうか。教員でさえ、そういう人がチラホラと……(笑)。時代の変化によって、人も変わるのかな。深く追求することによって、時間を費やすより、楽を増えたいから規則を作らざるを得なかったのでしょうか。楽をしようとする人が多くなったので

だすことに成功し、商品化した。その名もヤモリテープ。1cmあたり500グラムを保持できると言う。やるな! ヤモリ。ヤモリに似た生物に、井守(イモリ)という両棲類がいる。ヤモリに反して、イモリの尻尾は完全に再生される。しかも何度でも再生可能であるという。イモリは、眼のレンズや心臓さえも再生されるといって報告もあるようだ。この再生に関わる幹細胞の増殖メカニズムはまだ十分には解明されていないが、組織再生に関わる遺伝子を特定することは、ヒト組織の再生に向けた画期的な研究の足がかりとなるに違いない。すごいぞ! イモリ。

昨年、北里大学特別栄誉教授の大村智氏がノーベル生理学・医学賞を受賞したことは記憶に新しい。氏は、放線菌「ストレプトマイセス・アペル

メクニウス」が産生するエパーメクタン(イペルメクタン)を実用化し、ある種の寄生虫がもたらす風土病による失明の危機を克服することに成功した。象皮病や線虫症などに効果があることも分かっていた。やるじゃん、細菌。

ところで、細菌に駆逐される線虫だが、その仲間には信じられないほど特異な能力を備えたヤツがいる。彼の名は Cephus。ヒトの数百倍とも言われるイヌと同じくらい敏感な嗅覚を持ち、まるで優雅な香水に引き寄せられるかのように、ガン患者の尿中に分泌される微量な化学物質に引き寄せられるという。これが実用化されればガンの診断、治療において画期的なことである。生き物、万歳!! (河野)



上られました。生活面にしても、今の様に細かくは言いませんでした。それがいつの間にかいかな規則ができました。やるべきことをやらない人が増えたから規則を作らざるを得なかったのでしょうか。楽をしようとする人が多くなったので

いっばいだからね。今の医学部の学生は、我々の頃の何十倍も覚えることがあるはず。膨大な量の医学情報を理解し、覚えたいといけない。国試も大変だと思いませんか。昔は、教冊の教科書を丸暗記しておけば合格するの当たり前でした。だから全然苦にならなかつた。今は画像診断もたくさん種類があつて、知識量が全然違いますよ。器用にやらないういけな時代になつてしまったのかな(笑)。

——今の学生を見て気が付くことは?

佐賀医大の一番の問題と言つて過言ではないですが、定期試験の情報や

解答がLINEやツイッターにアップされています。それが印刷されて出回っている。僕も見ることがありますが……(笑)。ところが、その出回っている解答自体が正確ではない、だから同じ問題を試験に出してもみんな誤った答えを書くんです。悪しき慣習というか、忌々しきことですよ。やはり学生は自ら格しても意味がありません。国試もあるし、その後には患者さんも待っているから、後々困るのは自分たちです。それは医学部も看護学科も一緒!

——佐賀医大は、チューター制度の先駆けだったそうですね

開学当初から「チューター」がいました。もちろん僕も担任をしましたよ。小田教授も僕の担当学生でした(笑)。今はどのように運営しているか分らないけれど、僕の頃は月1回必ず集まり、お茶菓子を用意して世間話をよくしたものです。年に2回くらいは飲み会に連れて行っていました。今も飲み会とかあるの？



——先生にもよりますね。今は自粛傾向でしうか……(笑)

最近来た先生はあんまりやらないのかな。飲み会の話はさておき、チューター制度には実質的に機能している部分とそうでない部分があると思います。勉強の方法など、先生からアドバイスされることは結構役に立っていますよ。学生の皆さんも、困ったときには遠慮せずにチューターの先生に相談してみよう。

——看護学科に移られた経緯を教えてください

37年間の佐賀医大生活で、20年間は看護学科にいます。内科の講師をしていた頃、「看護学科に行かないか？」と言われてました。これも逆らえなかったですね(笑)。僕らの世代の間って、みんなそうだった。今の若い子には理解できないかな。

な。ところが行った後は良いが、看護学なんて全く分からない……。僕が当時思っていた看護師の役割は、患者さんの世話をし、医師の指示のもとに動くということ。しかし、看護学科で教授されていることは、自分で考え、患者さんの為に行動せよ、でした。医師の方が、看護師は、自分たちの指示のもとでしか動けない、と思われていたのかもしれない。言わば医師の傲慢です。

都会ではもうそんな考えはほとんどありません。しかし残念ながら、佐賀も含めて遅れている地域があるのも事実です。看護学科に来てからは、医師の指示だけを待つて動く看護師にはならないように、と言いつつ続けています。大学の看護学科を出た人はそのことを分かっており、必要なケアを自分で考え、すぐその場でやりなす。指示通りにしか動かない看護師だったら、医師にとっても負担だけが増え、大変だろうなと思います。

——初心を忘れそうになつた時には？

私は、学生時代をよく思い出しました。何もできず、大病院の看護師さんに多くのことを教わった、そんな自分を思い出すのです。看護師は患者さんの身近にいますから、医師以上に細かいことに気が付く素晴らしい存在なんです。患者さんの「思っていること、なんかね。だから回診後に看護師さんと呼ばれている？」と尋ねることが増え、大変だろうなと思います。

——看護学科長に就任されて3年です

とても3年とは思えないくらい苦労しました。多くのことを迅速に改善する必要があります。まだやり残したこともいっぱいありますが……。佐賀県の地域医療を良くするために、看護師の質を上げる努力も必要です。中枢教育機関である大学がまずはその役割を担うべきであると考え、

看護学教育支援センターを設立しました。学科長就任1年目はそのワーキンググループを立ち上げ、2年目の平成26年度からセンターの運営を開始しています。地域で働く看護師の生涯教育、というコンセプトで、学部や大学院の講義、あるいは演習などをほぼ無料で受講できます。今後は地域の多くの看護師にこのことを周知していく必要があると思います。このセットアップが一番苦労したことですね。あとは大学院の改革も大変でした。とにかく会議が多く、またその内容を教授会で発表するのも一苦労でした。

看護学教育支援センターの講義は13コマあったんですが、それがいつの間にか無くなりました。これは時代逆行するのではと思います。「せめて3コマでもいいから講義をしてほしい」とお願いして、これまでTBL講義の中で3コマだけ臨床演習の講義をしてきました。ヒトのDNA情報は一生変わらなす、家族も共有するとなると、その人の将来のみならず周囲にいろんな影響がでてきます。ヒトのDNAを調べるということは、このような倫理的問題を含めていろんなことを考えていく必要があり、とても大変なことなんです。そこで、佐賀にも遺伝診療体制を作る必要があると考え、平成20年4月、遺伝カウンセリング室を設立しました。

——具体的な業務を教えてください

遺伝カウンセリング室には専属のスタッフが不在で、私や基礎系講座の副島教授が兼任しています。兼任ですと時間が取れないので、症例は出るだけ絞りましたね。それでも相談の電話が結構かかってきました。相談者から自費診療として五千円を頂戴するわけですから、具体性のある資料も提示すべきだというポリシーのもと、事前に家系図を作り、どのような疾患がどのようになつたのか、そもそもどのような遺伝性の病気が疑われるのかを文書にまとめ、その病気に資する資料も作成しました。また、電話相談の前にスタッフミーティングを開

くのですが、そのために自分自身で勉強をしておくこともすごく大変でした。本学ではこの業務は兼任ですからとても大変ですが、佐賀県唯一の遺伝カウンセリング室として続けた方がいいのかなと思います。あとは副島先生が引き継いでくれるでしょう(笑)。ただ、遺伝診療により関連深い診療科である産科、小児科、神経内科、乳腺外科、消化器外科等で、このカウンセリングができる臨床遺伝専門医の資格を持つ医師が増えること、また認定遺伝カウンセラーの資格を持つ看護師さんが本学でも増えたいらいいと思っています。

——遺伝情報を簡単に調べられるのは……100年後でしょうか？

いえいえ、もっと近いでしょう。もう今は1人のDNAを数万円で網羅的に調べることが可能です。インターネット上で通販の様に「あなたの遺伝情報調べます」というのもありますけど、精度に関しては疑問が残るので、こういうのに引っかけた方がいいですね。

——悲観的になる相談者もいます

カウニングでは、最初に「その人の責任ではない」ということをお話しします。ある病気の遺伝子を持つということは大変なショックなことです。その人のせいではないのです。また、そういう遺伝子を持つことを早く知ることで、早めに定期的な検査を受けるなど、その人に良い影響を

与えるかもしれません。僕がいつも言うことは、正常か異常か、あるいは病気か病気でないかの二者択一で考えるのではなく、多様性を理解すべきだということです。日本では「遺伝」というと、病気が異常な体質を引き継ぐもの」としか認識されず、すごくマイナーなイメージだけが付きます。でも、欧米では「遺伝」の中に「形質を引き継ぐ」ということと「多様性」という2つの概念が含まれています。残念ながら、日本が遺伝学を欧米から導入した時には、「このうち多様性」の概念だけがすっぽりと抜け落ちてしまいました。最近やっと日本人類遺伝学会が文科省に働きかけで、中学校での遺伝の授業でも「多様性」について教えるようになっていきます。病気の発症についても同様です。病気の多くを占める多因子性疾患では、病気を発症するしないの根底に罹病度という考えがあつて、その罹病度を多く持つ人から少なく持つ人まで多様であり、これが一定の閾を



でも後悔はしていません。その時そのときに、自分が判断して良いと思うことをやってきました。60歳を過ぎてから、自分が死ぬときに頭の中ではどのような音楽が流れ、何を思い浮かべるのだろうか？とふと思うことがあります。ただ、この世とお別れる時、これだけには言えるのではないかなと思います。何も悔いはない」と。フランク・シナトラの「マイ・ウェイ」は以前から歌詞もメロディも好きな曲でしたが、最近、カラオケでもよく歌うようになりました。「多くのことをやってきて後悔はちよつぱり、だけどこれが自分の進む道だったと思える」、私も「マイ・ウェイ」にだんだん近づいていると思っています。

——一番好きな言葉は？

「みんなちがって、みんないい」というフレーズですね。金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」からの引用です。見事に多様性を表している言葉ですが、これが大正末期というのがすごいと思います。最近の若い人も、こういうことを理解しつつあるのかなと感じています。彼女がまた見直されていると聞きますし、SMAPの「世界に一つだけの花」の歌詞も似たような趣旨ですね。

——退職後のご予定は？

これもね、やはり上司ですよ(笑)。昨年の初夏、山口前学長に「老健施設で働いてみてはどう？」と言われてました。これまではずっと大学で教育畑を突き進み、遣り甲斐を感じることが多々ありました。特に卒業式の時はそうでした。60歳を過ぎてから、自分が死ぬときに頭の中ではどのような音楽が流れ、何を思い浮かべるのだろうか？とふと思うことがあります。ただ、この世とお別れる時、これだけには言えるのではないかなと思います。何も悔いはない」と。フランク・シナトラの「マイ・ウェイ」は以前から歌詞もメロディも好きな曲でしたが、最近、カラオケでもよく歌うようになりました。「多くのことをやってきて後悔はちよつぱり、だけどこれが自分の進む道だったと思える」、私も「マイ・ウェイ」にだんだん近づいていると思っています。

——最後に学生さんに向けてメッセージをお願いします

佐賀県の医療課題に取り組み、地域のために活躍してほしいと思います。若いうちはいったん佐賀から出て、よそで研修したり勉強するのはもちろんいいと思います。私も若いころは「絶対外国に留学する」と思い、実際アメリカにいた時には「一生住んでもいいかな」と思ったこともありましたが、やはり佐賀に帰ってきました。外国に限らず、いろんなところで学び、それを佐賀にフィードバックしてほしいですね。そして、佐賀でも世界的な研究をやってもらいたいと思います。

——いろいろなお話をありがとうございました

聞き手 西原・藤田

ネパール滞在記

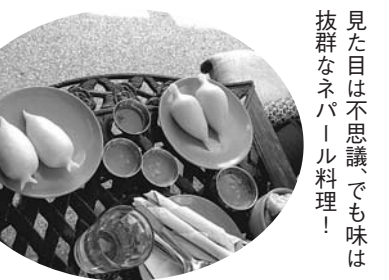
由で計画したネパール訪問ですが、その往路ではとんでもないトラブルが私達を待ち受けていたのです。

ネパールへは直通の飛行機がなく、韓国や中東などを経由せねば行けません。私たちは、情勢や金銭面から中国を経由して訪問しました。乗り継ぎの関係から、中国で1泊するまでは大きな問題はなく安心していました。しかし、その翌日大変な事態が発生しました。ネパール唯一の国際空港、トリブバン空港が事故で閉鎖されてしまったのです。幸いなことに大きな事故ではなく、ネパールの情勢をよく知らなかった私たちは、すぐに発着が再開されるだろうと樂觀的に考えていました。

が立ちません。その時になって、ようやく私たちは大変なことになったと焦り始めました。外務省からの情報では詳細が分からず、航空会社に問い合わせても状況が分からず、情報難民になった私たちは、とにかく不安な気持ちでいっぱいでした。そんな折、同じ飛行機に乗り合わせていた日本語を勉強しているネパール人の皆さんが「大丈夫？今、ネパールはこんな状態だから、もう暫く辛抱してね」と話しかけてくれました。その言葉に救われました。初めて会った私たちに何の見返りも要求せず、暇つぶしにとネパール語を教えてくれたり、ネパール式のトランプゲームを教えてくれたりと、大変優しく接してくれました。結局4日近くも飛行機が飛ばず、予定が大幅に変わってしまいました。が、憔悴することもなく楽しく過ごせたのは彼らのおかげです。飛行機を降りた後は別れてしまい、もう会うこともないかもしれませんが、でも彼らは一生私たちの戦友です。



ダルバール広場で決めポーズをしてしまいました！



見た目は不思議、でも味は抜群なネパール料理！

昨年春、友人3名と共にネパール連邦民主共和国へ行ってきました。ちょうどその1年前、佐賀大学で樋口健次郎先生の講演「スーパードクター」を聞いたのがきっかけです。北海道やネパールでの医療経験にとても興味を沸かされたことに加え、先生がネパールで毎年多くの学生や社会人の見学を受け入れていると知り、これは行くしかない！という衝動に駆られました。このような理由で、待機し続けるところが、再開の目処が再開されるだろうと樂觀的に考えていました。

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう



街の様子、建物が密集している



アーユルヴェーダクリニックの様子
いろいろな薬が販売されている



飛行機から見えるヒマラヤ山脈も絶景！



見ているだけでも楽しいお土産屋さん



にらめっこをしている気分になる模様の書かれた寺院、スワヤンブナート

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

予定が崩れてしまったため、ネパールに着いたのは近場の病院見学や観光を主に行いました。ネパールでは、西洋医学、アーユルヴェーダ、チベット医学といった様々な医療が提供されています。祈禱師もいて、ネパールで暮らす人たちは病気になつたら自分が信じる場所へ行くようです。アーユルヴェーダは主に慢性疾患を準備範囲とし、ハーブやヨガで治療を行っていました。そういう

(大野)

新任教授挨拶



泌尿器科学講座
教授
野口 満

2015年11月に佐賀大学医学部泌尿器科学講座の教授を拝命いたしました。野口満です。私は、長崎市で生まれ育ち、長崎西高校から長崎大学医学部へ進み、昭和62年に医師になりました。大学時代は野球部に所属し、

泌尿器科を志したのも、専門としてみると、どこも同じでしょうがそんな単純な学問ではなく、奥が深くわからない事だらけであったことは言うまでもありません。

泌尿器科を選択したのも1つの理由は「腎臓」という重要な臓器を扱うことに魅力を感じたことでした。このため、入局後は腎不全の治療としての透析療法や腎移植、あるいは腎癌、先天性腎症など腎疾患の診療に関わってきました。私が入局した頃は、毎週のように献腎移植を経験していました。当時は、現在の移植コーディネーターや臓器バンクもありませんので、現在の臓器バンク担当の仕事も含め、心停止下のドナー腎摘、腎臓の搬送、レシピエントの選択と術前の透析、さらにはリンパ球のクロスマッチまで行い、移植を行っていました。このため、数日間自宅に帰れないことも多く、結婚前の結納にも行けませんでした。

基礎研究に関しては、細胞間コミュニケーションを担うギャップ結合と腎臓との関連解析の研究を行い、学位を取得しました。ギャップ結合を構成するタンパクであるConnexinは癌抑制遺伝子の1つとして研究が行われており、腎臓の浸潤、転移のメカニズム、予後の関連等について解析しました。基礎研究の期間、簡単にデータは出ないのですが、論理的に考え、わかり易くまとめ上げるトレーニングにもなりました。じっくり論文を読む習慣ができました。

野球部の先輩・後輩とは毎日過ごしながら楽しい学生生活を送りました。今も続いているかと思いますが、当時の佐賀医大と長崎大との定期戦で佐賀に来た時は、設備が整った新設の本学がとて輝かしく見えました。卒業後は、学生時代から泌尿器科を専攻したいと思っていたため、まったく迷うことなく長崎大学泌尿器科教室に入局しました。このため、入局前の勧誘でさほど美味しくない目にあうこともなく、今思うとなんと素直で手のかからない新人医局員だったことかと思えます。

泌尿器科専攻を決めた理由ですが、さほど真面目でも優秀でもない学生でしたが、泌尿器科の講義がとて理解しやすかったからです。泌尿器科は難解な疾患を取り扱うわけではなく、これなら自分もついて行けるかもと考えたのが、今思う

2010年からは、縁あって前任の魚住二郎先生にご指導いただき、佐賀大学泌尿器科で仕事をしています。小児泌尿器科診療の立ち上げ、腎移植医療の再構築、ロボット手術などに従事してきました。また、現在の超高齢社会において、看護・介護の現場では排泄管理をどうすればいいのかわからないという声が多いのが現状です。それは日本の医学・看護教育に「排泄学」がないためで、先輩方から教わる経験的・伝統的なケアが続くことになりました。

最後に、泌尿器科は外科的・内科的診療を併せ持ち、小児から高齢者までを扱い、診断から治療まで一科解決型のスタイルも特徴です。さらに、2015年の男性癌罹患率No.1となった前立腺癌をはじめとする泌尿器科他、腎不全、副腎疾患、排尿障害、男性不妊、尿路結石、感染症など守備範囲が広く、超高齢社会、メタボ社会で今後ますます泌尿器科医の役割は増してくるものと思われます。今後、我々と一緒に泌尿器科学を目指してくれる学生諸君を待っています。気軽に医局を訪ねてください。

泌尿器科を専攻したいと思っていたため、まったく迷うことなく長崎大学泌尿器科教室に入局しました。このため、入局前の勧誘でさほど美味しくない目にあうこともなく、今思うとなんと素直で手のかからない新人医局員だったことかと思えます。

泌尿器科を専攻したいと思っていたため、まったく迷うことなく長崎大学泌尿器科教室に入局しました。このため、入局前の勧誘でさほど美味しくない目にあうこともなく、今思うとなんと素直で手のかからない新人医局員だったことかと思えます。

泌尿器科を専攻したいと思っていたため、まったく迷うことなく長崎大学泌尿器科教室に入局しました。このため、入局前の勧誘でさほど美味しくない目にあうこともなく、今思うとなんと素直で手のかからない新人医局員だったことかと思えます。

泌尿器科を専攻したいと思っていたため、まったく迷うことなく長崎大学泌尿器科教室に入局しました。このため、入局前の勧誘でさほど美味しくない目にあうこともなく、今思うとなんと素直で手のかからない新人医局員だったことかと思えます。

学生総会開催報告



鍋島キャンパス初の学生総会が、昨年12月16日、臨大講堂にて開催された。会場はほぼ満員となり、学生たちの関心の高さが窺えた。学生自治会会長の力久君による自治会発足までの経緯説明に始まり、部活動および授

業カリキュラムに関するアンケート結果の報告、部活動宣言の発表と続き、最後に口角泡を飛ばす質疑応答の末、自治会規約と部活動統括委員会規約が可決され、総会は終了した。

佐大医学部をより良くしたいという願いは誰でも共通であろう。確実にその一翼を担っていくであろう学生自治会の今後を期待しつつ、状況をレポートしていきたい。

(陣内)

クリスマスキャロリング



クリスマス目前の12月22日、毎年恒例のイベントであるキャロリングが附属病院の病棟で行われました。キャロリングとは、イエス・キリストの誕生にまつわる聖歌を厳かに歌って聖日を祝う催しです。暖かいオレンジ色のキャンドル型ライト

を片手に携えて病棟を歩く姿は、とても幻想的でした。病室から出て待っている患者さんの中には、一緒にリズムをとって楽しむ姿もみられました。メンバーは混声合唱部が中心ですが、部員でなくとも事前の練習を経て参加することがあります。

(岩永)

医学部の風景⑥

溜め枘に学ぶ危機管理

雪の降りしきる某日深夜、家路を急ぐ最中のことである。医大北に位置する増田交差点で、黄色のジャンパーを身にまとった交通整理員らしき人影を見かけた。すると次の瞬間、突然車の前に立ちほだかり、停車を求めてきた。何とこの方、警察官だったのだ。驚く間もなく、免許証の提示に呼息の検査…。そう、飲酒運転の取締りであった。結果はもちろんお咎め無しで、「ご協力、ありがとうございます」とい

今年には部員が8名、それ以外の有志が14名で、うち11名は本庄キャンパスからの参加者でした。興味がある方は、ぜひ来年参加されてみてはいかがでしょうか？



このような地道な努力が飲酒運転の撲滅に繋がれば良いのだが、ある先生によれば、「飲酒運転は無くならないでしょう。シラフの時に飲酒運転は犯罪だ」と思っている。アルコールで善悪の判断力が鈍ってしまうからハンドルを握るんだもの。もはや車に飲酒検知器をつけないとね」とのこと。虚しい気持ちにもなるが、理性で抑えきれないのなら、このような措置を講ずべきなのかもしれない。飲酒運転に限らず、お酒で失敗を繰り返す学生さんは、まずはシラフの時に知恵を絞って、どうしても酒にのまれないかを考えてみよう。それでも対処できなければ、

溜め枘と、その中に設置された廃液貯留槽である(写真右下)。実はこの槽にはアルコール系の廃液がストックされている。なぜこのように地中にあるのだろうか？そこには、有事を見据えた先人の知恵があった。火災が発生し、この貯留槽に火の手が及ぶことを想像してみよう。もしこれが地上にあつたら、爆風を伴った火

編集後記

記憶に新しい本年1月24日、記録的な寒気のため佐賀県内は各地で大雪となった。三瀬トンネル付近では、積雪が50センチを超えたという。交通機関の混乱、多発するスリップ事故など、雪に慣れない九州人にとっては迷惑この上ない自然現象である。

その翌週のことである。所用でタクシーに乗った際、運転手さんから「ちょっと気になる話を聞いた。大雪の日に乗せた80過ぎの年輩のお客さん曰く、数十年前にも佐賀で大雪が降り、背振の方では遭難者も出たらしいのだ。北国ならともかく、佐賀で雪による遭難事故が起こるといふのは、ちょっと想像が付きにくい。思わず「そうなんですか!?」と驚いたのだが、あとで気になって調べてみると概要が判明した。

昭和37年12月から翌38年2月にかけて、北陸地方を中心に、いわゆる三八(サンパチ)豪雪が各地を襲った。特に1月8日には、佐賀県でも地方気象台開設以来の大雪となり、2月中旬まで交通などに大きな影響が残ったという。そんな中、雪が降り積もった背振山系にある北山(ほくざん)小学校の中村富可男(ふかお)教諭は、教え子たちの身に何かあつてはいけないと心配し、学校から集落まで7キロ余りの道のりを毎日付き添って家まで送り届けていた。以下、<https://fukukoka.co.jp/human/2007/01/21.html>からの引用である。

編集部からのお知らせ

医学部学生新聞では記事を随時募集しています。研究室での実習体験、課外活動報告、音楽・書籍評論、グルメ情報、あるいは身の回りの出来事に関するネタをぜひエッセイなど、なんでも結構です。旅先で撮影したお気に入りの風景写真の一葉でも歓迎です。ぜひ活字媒体として一生の思い出を作ってください。

新聞編集委員

- 倉岡晃夫教授 (編集長)
- 河野 史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手(副編集長)、鈴木源晟 (研修医)、大野 渚、西原歩美、藤田真衣 (医4)、岩永鴻之介、陣内一輝(医2)

要望などの連絡先
学生サービス課総務
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp

育て、あるいは医療従事者として、どれほどの責任感や覚悟を持って学生さんや患者さんに献身的に尽くしているか、それを天国の中村先生から問われている気がしてならない。

さて、2月号では恒例の退職教授挨拶として、看護学部長の大田教授にインタビューをお願いした。看護学教育研究支援センターの立ち上げなど長年の御功績に敬意を表しつつ、あらためて深く御礼申し上げたい。なお本号の発行は例年より大幅に遅れ、愛読者におかれては心配をおかけしたことと憂慮する。編集部を代表し、心よりお詫び申し上げます。(倉岡)